

広島大学ひろしま平和科学コンソーシアム
広島文学資料保全の会

池田正彦・松尾雅嗣(編)

峠三吉 被爆日記

この文書内では赤色の文字をクリックするか、しおりを利用して移動できます。

日記を見るためには、(1)、(2)いずれかをクリックしてください。

序
まえがき
謝辞

- (1) 峠三吉 日記
昭和20年7月29日から11月19日(資料番号 T0087)
- (2) メモ - 覚え書 - 感想 -
昭和20年8月から9月15日(資料番号 T0081)

序

広島大学ひろしま平和科学コンソーシアムは、大学の地域貢献事業の一環として平和科学に関する教育・研究活動を有機的な連携の下に発展させることを目的として、広島大学が自治体との協力により平成14年に設立した地域貢献のフォーラムです。

コンソーシアムは、平和メッセージ発信事業の一つとして、これまで広島大学学術顧問・国際司法裁判所判事小和田恆先生の特別講義の記録のほか、カザフスタン共和国セミパラチンスク近郊の核実験被害の実態調査報告などを出版してきました。ここに刊行する峠三吉の被爆後の日記と記録はこれに続くものです。

詩人の眼が見た原爆投下直後の悲惨な状況を、直筆の写真を通じて読み取り、核兵器のない世界への出発点としていただければ幸いです。

平成16年11月

広島大学ひろしま平和科学コンソーシアム
委員長 松尾 雅嗣
(広島大学平和科学研究センター・大学院国際協力研究科 教授)

まえがき

峠三吉と言えば、「ちちをかえせ ははをかえせ・・・」を序詩とした『原爆詩集』をまず思い出す。当初この詩集は、壺井繁治を通じ河出書房へ持ち込まれたが、結局返却され「八月六日までに出すとすれば余裕がなく、そちらで大至急ガリ版でも出して下さい」（昭26・7・24付、壺井繁治からの葉書。松尾雅嗣・池田正彦（編）『峠三吉資料目録』（広島大学平和科学研究センター）、資料番号 M0667）といった火急的状况のなかで、実際、孔版印刷（ガリ版）500部の小冊子として発行された¹⁾。

それは、アメリカが朝鮮戦争において再び原爆使用を検討しているという緊迫した世界情勢を受け「広島市民からも直ちに意思表示がなされるべきだ」（日記）との強い抗議の意思をこめての行動であった。この詩集に収録された作品の多くは、昭和26年1月から3月にかけて、国立広島療養所の一室で一気書きあげられたもので、自身の被爆体験と前述の「原爆使用」への告発が大きな動機となっている。

峠三吉は、昭和20年（1945年）8月6日、爆心から約3キロの広島市翠町の自宅で被爆した。額に小さな負傷をするが、その直後から親戚・友人・知人の安否をたずね、市内の各所を歩きまわり惨状を克明に記録した。例えば、8月8日の日記には、

僅かに破れた猿又をまとひ、汚れし繃帯と塗付せる薬品と砂と泥と火傷の赤剥けとにて、顔面より全身直視するに耐へぬ汚穢な形相と変じ、振り乱したる髪のまま裸足を抛り出して横はるは殆ど女ばかりにして、又注意してみれば殆どが女学生なりしもの如きも無惨なりき

と記している。

峠三吉は、被爆の状況について、二種類の記録を残している。ひとつは、大学ノート2冊を綴じた昭和20年1月1日から同年11月19日までの日記帳（前掲目録資料番号 T0087）である。他のひとつは、「メモ - 覚え書 - 感想」と題された昭和20年8月から9月15日までの記録（同資料番号 T0081）であり、古い随意日記に記されている。後者は、

昭和二十年八月（祖国危機に瀕してあり）

毎日日記を付くる事もあたはずなりぬ。故に最 を此のノート一冊に據る。

という書き出しで始まる覚書である。

「八月六日」「死」「炎」「盲目」「仮繃帯所にて」「眼」「倉庫の記録」などの作品群は、この時の自らの体験と記録をもとに書きあげられたものである。こうした日記や覚書は、もちろん作品化を目的としたものではないが、その惨状に対し、詩人・文学者としての冷静な眼で書き綴られ、原民喜の『原爆被災時のノート』とともに被爆の記録としても、また原爆文学の一つの原点を示すものとしても、貴重な資料ということができる。

われわれは現在峠三吉資料の目録作成と電子化の作業を進めている²⁾。この作業の目的のひとつである目録は既に刊行し、現在デジタル化した画像資料の整理と編集を行っている。デジタル化した画像は1万点を越える。これをすべて印刷して公刊することは、公開可能な画像に限ったとしても事実上不可能である。それゆえ、CDないしはDVDといった電子媒体で公表することを考えている。しかし、その重要性に鑑み、被爆直後の峠三吉自身の記録をまず写真版で公開することとした次第である。

本画像集に収めた画像は、峠鷹志氏所蔵の資料をマイクロフィルムに撮影（1988年6月松林俊一氏撮影、助手勢良寛氏）したものをデジタル化したものである。日記については分量の問題から、昭和20年7月29日以降、日記の記されたノートの終りまで、即ち20年11月19日までを収めた。記録については、記された全文を収めた。収録した画像のうちには、原資料の問題、撮影の問題などのため、不鮮明なものも少なくないが、あえて取捨せずすべてを掲載した。この点は将来改善すべき課題である。また、日記中には、明らかに他人によると思われる書き込みがあるが、その理由は不明である。

残念ながら、同時代にともに活動した少なくない人たち、近くは、好村富士彦さん、山代巴さんも鬼籍に入られ、峠三吉あるいは被爆を語る環境は確実に狭まりつつある。今回の「被爆日記」の写真版刊行が、「ひろしまの伝説がやさしい唇に語られるのをゆめみる」（「朝」）時代を迎えるための一つの手がかりとなることを願わずにはいられない。

2004年11月
編者
池田 正彦
松尾 雅嗣

註

- 1 『原爆詩集』はその後二度復刻されている。前掲目録資料番号O0002 及び O0005。
- 2 詳細については前掲目録「まえがき」参照。

謝辞

本研究には、平成15年度前期広島大学研究支援金「原爆文学を中心とした広島原爆資料の目録作成と電子化の研究」（研究代表者:松尾雅嗣）（187万円）の支援を受けた。広島大学ひろしま平和科学コンソーシアムには出版等での財政的支援を受けた。

また、峠三吉著作権継承者である峠鷹志氏と、マイクロフィルム版の所蔵者である広島市立中央図書館には資料閲覧とデジタル化に際しお世話になった。

広島大学大学院国際協力研究科博士課程前期の深林真理さん、前田さららさん、橋本金平さんには資料のデジタル化でお世話になった。

ここに記して感謝の意を表したい。